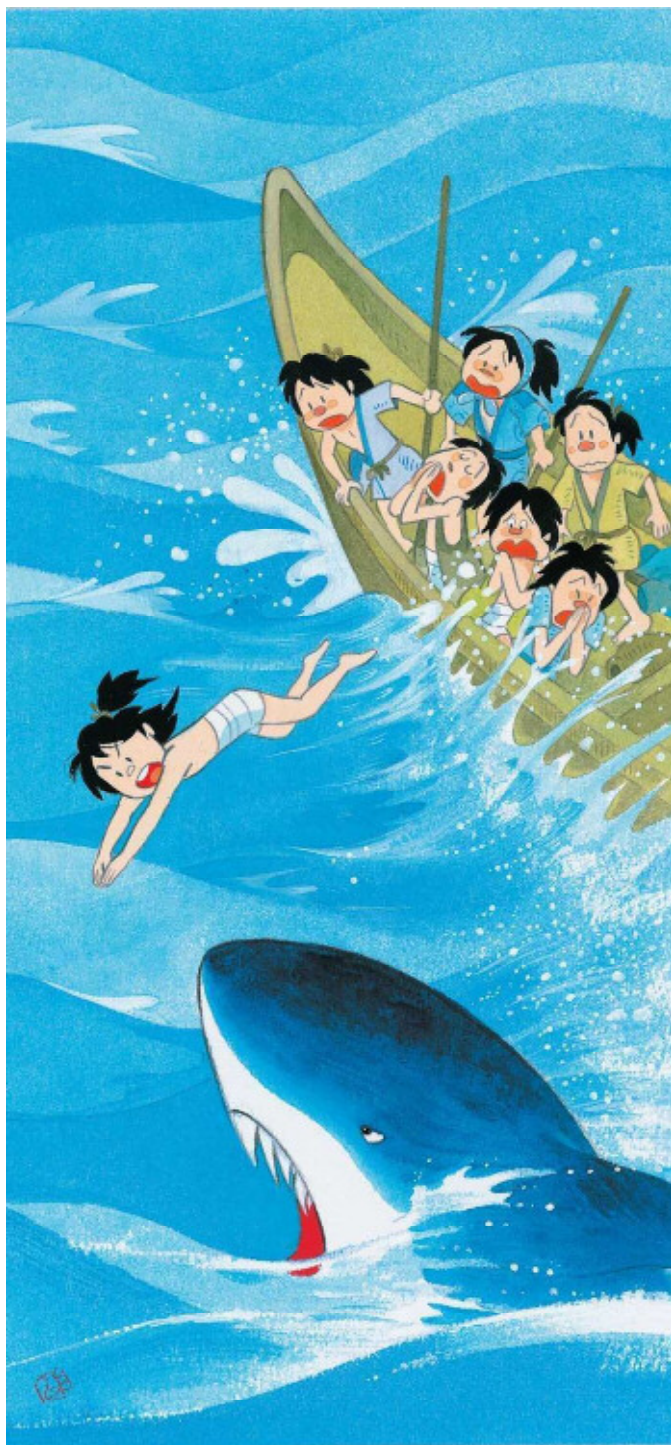


「広報しながわ」平成21（2009）年2月1日号より転載
（イラスト：池原昭治）



品川昔ぼなし

サメに追われた若者と観音様

東大井一・二丁目のあたりは「鮫洲」と呼ばれています。この地名は、鎌倉時代、サメの腹の中から観音様が出てきたという話に由来しているとも言われています。そんなお話とは……？

「観音丸」という舟に乗った七人の若者たちは、今まで見たこともない大きなサメに追われていました。サメは舟の周りを泳ぎながら、体当たりをしてくれます。岸まではかなりの距離があり、このままだと全員がサメのえじきになってしまいます。一番年上の若者が声をしぼり出しました。「仕方がない。一人が海に飛び込んで犠牲になる、その間に逃げよう」。それを聞いて六人は驚きました。しかし、ほかに方法がないと、はちまきを海に投げ一番早く沈んだ者が海へ飛び込むことにしました。一番早く沈んだのは、言い出した若者ののはちまきでした。「よし、おれが飛び込む。みんなはその間に逃げてくれ！」

熱心な観音信者でもあった若者は、着物を脱いで肌身離さず身に付けていた観音像を腹帯に入れたまま海へ飛び込みました。若者が沈む海の中へとサメが向かっていくすきに、六人は急いで舟を岸へと向かわせました。

ところが、しばらくするとサメとともに海中に沈んだはずの若者が浮かんできたのです。六人は歓声を上げ、若者を舟に引き上げました。「奇跡だ！ よかった！」。みんなは再会を喜びました。「あっ！」。若者は腹に手を当てて叫びました。「観音様がない！」

それから何年かたったある日、漁師の網に大きなサメがかかりました。そして腹の中から観音像が出てきたのです。この話は持ち主の若者にも伝わりました。「観音様が身代わりになってくださったのか……」

この話を聞いた鎌倉幕府の執権、北条時頼は「めでたいことがらの前ぶれであろう」と、その海辺近くにお堂を建てて観音像を安置し、海が安全であるようにと海安寺（南品川五丁目）と名付けました。

「鮫洲」の地名のおこりについては、この話に由来するもののほか、この付近の干潟から清水が出ていたので「砂水」が転じたという説などがあります。